

## 類義的な漢語語基の日中比較

——「回・帰・返・還」を対象として

陳 月吾 杜 英\*

### A Comparative Analysis of Similar Chinese Derived Morphemes between Japanese and Chinese

Yuewu Chen Ying Du

#### Abstract

Chinese characters ‘kai, ki, hen, kan’ are representative verbal Chinese derived morphemes. These four characters all have the meaning of ‘return’ in both Japanese and Chinese, but syntactic and semantic functions of the morphemes in the two languages are not always the same. By picking out the headwords which contain these four Chinese characters from dictionaries, and then analyzing the meanings and constituents, this paper intends to compare the differences of lexical productivity of these four characters between Japanese and Chinese.

キーワード：日中両国語比較、類義的な漢語語基、回・帰・返・還、意味、構造

形態論によると、形態素は意味を持つ最小単位である。語基は単語の意味的機能を担って、語の基幹となっている形態素である。具体的に説明すると、野村雅昭(1988)<sup>1</sup>により、漢字一字で表記され、最小の意味を持つ言語単位を「字音形態素」と呼び、それを「語基」と「接辞」に分けた。更に、語基を体言類(N)、相言類(A)、用言類(V)、副言類(M)といった四種類に分類した。用言類語基はつまり、動詞性語基で、そのうち、「回・帰・返・還」は動詞性語基として、最も代表的なものであり、日中両国語にも共通して使われているが、若干異なる所もあるであろう。

本稿では、日本語について『広辞苑』、中国語について『現代汉语词典』<sup>2</sup>を主な参考資料として、両辞書に見出し語になっているこの四つの漢字を含む語<sup>3</sup>を取り出し、意味、及び構成といった二つの角度から検討してみたい。

#### 1 意味

日本語の「回・帰・返・還」と中国語の“回、归、返、还”<sup>4</sup>はみんな「もとへもどる」という

---

\* 中国、中南大学外国語学院

意味を持っている。つまり、「もと在った場所に再び位置する」、あるいは「もとの状態にもう一度なる」という意味である。

日本語の場合、「回・帰・返・還」は動詞性漢語語基で、形態素としてはいずれも単独で一語になれない「結合形」である。読み方について、訓では「回」に「まわる、めぐる、みる、もとおる」、「帰」に「かえる、かえす」、「返」に「かえす、かえる」、「還」に「かえす」などがあり、音ではそれぞれ「カイ、エ（呉音）」、「キ」、「ヘン」、「カン、ゲン（呉音）、ワン（唐音）」がある。

また、意味上では、「回・帰・返・還」が「もとへもどる」の意味を持つ語が多数ある。例えば、「…回復、回生、回春、回想、帰宅、帰国、復帰、返路、還元、生還…」などが多数挙げられる。まず、「回」が動詞性語基としての意味を見てみよう。

(1) 妬みと惜しみと悔恨との念が一緒になって旋風のように頭脳の中を回転した。

(田山花袋『布団』)

例文(1)の「回転」の語基の「回」は、「まわる、まわす」の意味である。また、「回路、回覧、回遊」なども例として挙げられる。ということで、「もとへもどる」という意味と合わせて、漢語語基の「回」は動詞性の面で主にこの二つの意味がある<sup>5</sup>。

(2) …(タテ)の折衝は、ある意味で単純に帰着しすぎるのであるが…

(中根千枝『タテ社会の人間関係』)

例文(2)の「帰着」は、「帰趨、帰服、帰順」などの語と同様、「あるべき所におさまる、よりしたがう」の意味を持つ語基の「帰」を含める。また、「帰寂」、「帰天」などの「帰」は「死ぬこと」を表す。そのほか、語基の「帰」には、「とつぐ、嫁に行く」という意味もある。その例としては、「帰嫁」が挙げられる。

動詞性語基の「返」と「還」は「もとへもどる」という自動詞としての意味のほか、「返事、返信、返礼、還付」などの語例のように、「もどす、かえす」という他動詞としての意味になることも見られる。さらに、「還暦」、つまり生まれた年が六十一年後にめぐってくるという意味を持つように、「還」はまた「ひとめぐりすること」という意味も持つことが分かる。

現代中国語では、“回、归、返、还”の中、“返”を除き、独立に動詞として文を構成できる。“返”は古文には常に独立で用いられるが、現在ではそういう用法が消えた。

(3) 因为回了一趟卫家山的娘家住下几天…/衛家山の実家へ四、五日帰っていたので…

(鲁迅『彷徨』)

(4) 那群小猴自然全归祥子统辖。/餓鬼どもの世話は自然祥子のうけもちということ

になった。

(老舍『骆驼祥子』)

(5) 觉慧愉快地还了礼…/覚慧も愉快になって礼を返した…

(巴金『家』)

このように、独立に文の成分になれるから、語を構成する生産性も自然に高くなる。従って、この四つの動詞性語基から組み立てられた語も多い。一方、その意味上には、無論、いずれも「もとへもどる」の意味がある。“…回乡、回家、回国、回来、归队、往返、遣返、返修、还乡、还俗…”などは例として挙げられる。次の例文を見てみよう。

(6) 他的思想旋风似的在脑里一回旋…/考えが旋風のように彼の頭の中をかけめぐった。(鲁迅

『呐喊』)

(7) 鲍秉德一口回绝。/鮑秉徳はきっぱりことわった。

(王安忆『小鲍庄』)

(8) 让别的铁匠给回回炉…/別の鍛冶屋に鍛えなおさせたり…

(浩然『金光大道』)

(9) 道静没有再回头。/だが道静は、もうふり返ろうとはしなかった。

(杨沫『青春之歌』)

中国語の例文(6)の“回旋”の“回”は日本語と同じく「まわる、まわす」の意味に相当する。例文(7)の“回”は「ことわる」、例文(8)の“回”は「やりなおす」、例文(9)の“回”は「ふりかえる」の意味であるが、日本語の動詞性語基の「回」はこういった意味を持っていない。

中国語の“归”は動詞性語基として、他の漢字と結合して語になる場合、「もとへもどる」(例：归来、归途)、「もとへかえす」(例：归还)、「あるべき所におさまる、よりしたがう」(例：归纳、归顺)という意味になる。“返”は「もとへもどる」という意味に対して、“还”は「もとへかえす」(例：偿还、还账)、「自分がされた行動を相手に返す」(例：还嘴、还手)という意味になる。

結論として、日中両国語におけるこの四つの類義的な漢語語基は、意味上には似ている所が多いことが分かる。特にこの四つの漢字を含む日中同形語の区別も必要である。『広辞苑』と『現代汉语词典』を調べた結果、52組の同形語を発見し、次の表で示しているように、五種類に分類することができる。

表1 意味分類

A	意味がほぼ一致しているもの	帰途/归途、帰心/归心、回想/回想、回避/回避、回答/回答、回天 <sup>6</sup> /回天、回収/回收、帰田/归田、帰期/归期、帰向/归向、帰降/归降、帰順/归順、還魂/还魂、還俗/还俗、償還/偿还、奉還/奉还、返還/返还、帰結/归结、帰属/归属、回顧/回顾、帰天/归天、還願/还愿、回護/回护、回廊/回廊、巡回/巡回、回帰/回归、回流/回流
B	意味に一致した所があり、日本語に他の意味があるもの	生還/生还、返照/返照、回遊/回游、回春/回春、
C	意味に一致した所があり、中国語に他の意味があるもの	回生/回生、回信/回信、低回/低回、帰納/归纳、回復/回复、挽回/挽回、撤回/撤回
D	意味に一致した所があり、日中両言語とも他の意味があるもの	回路/回路、回腸/回肠、回旋/回旋、往返/往返
E	意味が全く異なるもの	迂回/迂回、還礼/还礼、回合/回合、回報/回报、帰着/归着、回青/回青、回転/回轉、帰還/归还、回礼/回礼、回音/回音

(10) 夜八時半にやっと腰をあげ、疲れきっていたが三人で帰途についた。

(井伏鱒二『黒い雨』)

(11) 我归途中经过他家的门口, 便又顺便去吊慰。/私は、帰途彼の家の門前を通りかかったとき、ついでに弔問に立ちよってみた。  
(魯迅『彷徨』)

例文(10)の「帰途」と例文(11)の“归途”は、同じく「帰り道、帰路」の意味である。このような意味がほぼ一致しているものの数が最も多く、全部で27組もあり、また例として、日本語の「帰心」は「故郷、家などに帰りたいと思う心」、「ある人に心から服従すること」という二つの意味を持つ。一方、中国語の“归心”は、“回家的念头、心悦诚服而归附”という意味であり、ちょうど日本語のと一致していることが分かる。この二つの語が同形同義語と言える。このように、漢語語基による組み合わせには、意味的な相似性が存在するため、中国人の日本語学習者は親近感を覚えることができる。

中国語の“生还”は「生きてかえる」という一つの意味しか持たないが、日本語の「生還」は、「野球で走者が本塁にかえって得点すること」というもう一つの意味を持つ。このような、意味に一致した所があり、日本語に他の意味があるものが全部で4組ある。また、意味に一致した所があり、中国語に他の意味があるものもある。例えば、同形語「回生」における「いきかえる」という意味は両国語にもあるが、中国語の“回生”はさらに“对前一阶段已经学会的东西又感到生疏”、つまり「腕が鈍っている、なまっている」という意味を持つ。

第四種類は、両国語においていずれも複数の意味を持ち、その中で一致した所と、異なる所が共に存在するものである。例えば、「回路」は両国語で同じく「電流の通路」という意味を持っている。ま上記の例文にある「迂回」と“迂回”について、語形は違いがないが、意味は全く異なるのである。例文(12)では、「まわり道をする、ある所を避け、遠回りして行くこと」の意味であるに対し、例文(13)で示しているように、中国語の“迂回”は「曲がりくねっている」の意味である。さらに、“迂回”は「敵の横や背後に回りこんで攻撃する」というもう一つの特有の意味を持つ。このような類は両国語に11組ある。た日本語では「生体の物質代謝経路のうち循環的な部分」という呼称であるに対し、中国語では、「かえり道」という特有の意味もある。また、「回腸」は「屈曲が甚だしい小腸の後半部」を指すのは日中共通であるが、また日本語の場合「非常に深く感動すること」の意味に対し、中国語の場合“形容内心焦虑”の意味で、つまり「気を揉む、いらいらする」という心境を描くことができる。

(12) 石をよけるように私をよけて迂回した。  
(三島由紀夫『金閣寺』)

(13) 路有曲折迂回, 人有升沉进退。/道には紆余曲折があり、人間には浮き沈みがある。  
(戴厚英『人啊, 人』)

## 2 構造

語にはその文法的意味を理解するため、語の構成についても認識する必要がある。調査により、日中両国語に「回・帰・返・還」は動詞的要素として語を構成する際、下図で示しているように、「V+N」と「V+V」のパターンが最も多いため、この二つのパターンから四つの漢語語基の文法的働きを分析してみる。

図1 構成パターン

日本語：                    ———[V+N]—————例：回春、帰港、返品、還願…………… 90 語  
                              └——[V+V]—————例：回診、復帰、返答、召還……………104 語

└─[A+V]─┐	例：低回、早帰……………	2語
└─[M+V]─┐	例：直帰、再返……………	2語
└─[V+A]─┐	例：返上……………	1語

中国語：

└─[V+N]─┐	例：回国、归西、返航、还账……………	79語
└─[V+V]─┐	例：来回、归还、返聘、往返……………	103語
└─[A+V]─┐	例：低回……………	1語
└─[V+A]─┐	例：回暖、回青、回空、返贫……………	6語

## 2.1 「V+N」

(14) 直子は まもなく国に 帰る。

S O V

例文(14)に示しているように、日本語では「S+O+V」が典型的な語順である。「V+N(O)」という構造は語順に反し、統語的には不自然になる。しかし、日本語の動詞は連体修飾機能があるから、「N(O)+V」より「V+N(O)」という構造の方がより造語力が強い。だから「国に帰る」は「国帰」ではなく、「帰国」になるわけである。また例としては、「金を返す→返金」「俗人に還る→還俗」など多々ある。

中国語の場合、日本語と違って統語上では「S+V+O」が典型的な構造である。例文(14)を中国語に訳すと、“直子不久将回国”になる。このような構造を持つ文を圧縮したりして、“回国”つまり「V+N(O)」というパターンの語が簡単に出来上がるから、中国語にも「V+N」の構造は造語力が強いことが分かる。また、調べた結果により、中国語に「V+N」の構造で複合した79語の中、動詞が56語で圧倒的に多かった。つまり、動詞と名詞が複合して、名詞ではなく、動詞になる可能性がより高い。例えば、“回味”、“归公”、“返利”、“还手”などが動詞である。これは、中国語には、「述語+目的語」という構造が一般的に動作などの概念を表すことが原因になるからである。

## 2.2 「V+V」

「V+V」という構造では、動作、変化、あるいは状態を表す動詞性漢語語基としての前項と後項が結びついた複合語である。このような構造を持つ二字漢語には、「継起構造」と「同時構造」との二種類がある。

継起構造は時間的に先行する前項と後続する後項で組成された構造である。例えば：「配給(配り与える)」、「溺死(溺れて死ぬ)」などが継起構造である。それに対し、「回収」や「償還」などのような、前項と後項が同時的な関係にあり、一つのまとまりの行動を表す構造は同時構造である。

考察により、日本語には「回・帰・返・還」から組み立てた「V+V」という構造を持つ二字漢語がすべて同時構造に属する。この四つの漢字が別の動詞性語基と複合し、それを中心として修飾したり、意味を補充したりし、元来自身の持つ「もとへもどる」などの意味が薄くなる傾向が窺える。「撤回」という語に、「撤」と「回」との二つの語基の中、前者は意味上では主要語基で、「回」はただ動作の方向性を強調しているだけである。無論、中国語には「撤回」との同形同義

語“撤回”があるから、このような構造も存在している。しかし、中国語における“回来”、“回去”という語例には、同じく同時構造であるが、“回”は意味を表す中心部で、方向性を表すのは後項の“来”と“去”になる。これは日本語の「回、帰、返、還」が稀に見られる機能であるから、日本語の「回、帰、返、還」が同形の中国語の“回、归、返、还”ほど造語力がないことが明らかである。

また、日本語における語の意味関係に基づく分類について、松下大三郎（1979）<sup>7</sup>は対等関係、修飾関係、実質関係、補足関係と客体関係の五つをあげた。「回・帰・返・還」を含む「V+V」の構造パターンには三種類がある。中国語の場合も同様に、その漢字の間にこのような三種類の関係がよく見られる。一つは、「回帰」、「返還」のような、前後二つの語基が同じ品詞で、意味も相似せいでいる類である。つまり前項と後項とが対等的に並立する対等関係である。また、「回顧」という語のように、後項の「顧」は意味の中心になり、前項の「回」は後項の意味を限定する修飾関係になる。もう一つは、後項が前項の意味を補う補充関係になる。その例としては、中心語が前項にある「返済」、「奪回」などが挙げられる。

### 3 まとめ

本稿は「回・帰・返・還」という四つの類義的な動詞性漢語語基を検討対象とし、日中両国語における意味上と語構造の相似性を認める上で、微妙でありながらもその相違性を捉えようとした。この四つの漢字はもともと中国から日本に伝えられたのであるが、その意味や字形が進化したつ、日本人に違和感も覚えずに使用されている現在に至るまでは長年に渡ったのである。また、両国語のシンタクスの差異がかなり存在しているから、動詞性語基としては意味や構成には微妙に異なったり、アンバランスであったりするののも当然である。

以上、検討した動詞性語基以外の品詞性を持つ語基について、考察や分析を行う必要があると思う。また、両国語に共通する漢語語基の時代と共に変化してきた経緯も続いて今後の課題となる。

#### 注釈

- 1 野村雅昭「二字漢語の構造」により
- 2 本稿に出た語例、またその意味の説明はすべて『広辞苑』及び『現代汉语词典』によるものである。
- 3 日本語と中国語の対照を行うが、紛らわしい場合に日本語を「」で、中国語を“ ”で囲み区別する。
- 4 本稿では、漢字一つの単一語基しか考慮に入れない。例えば、「回転寿司」という語に「回」を含めているが、「回転」のような複合語基は論外にするから、単一語基から組み立てる二字漢語のみ調査の対象とする。
- 5 無論、日本語の「回」は名詞として、「一回り、度数」、「イスラム教のこと」などの意味もある。同じく名詞として「返」も「度数を数える語」である。中国語の場合、“回”は数量詞、“归”と“还”は名詞としての意味もあるが、ここでは、動詞としての意味しか検討しない。
- 6 「回天」は「第二次大戦の末期の人間魚雷」ということも指すが、固有名詞であるから論外にする。
- 7 松下大三郎『改選標準日本文法』により

#### 例文出典

中日対訳コーパス（第一版）（2003） 北京日本学研究中心

参考文献

- 1 荒川 清秀 (2004) 「日中両国語における漢語語基の意味と造語力」『日中対照言語学研究論文集』 和泉書院
- 2 野村 雅昭 (1998) 「結合専用形態の複合字音語基」 早稲田大学日本語研究教育センター紀要
- 3 任 学良 (1981) 『漢語造詞法』 中国社会科学出版社
- 4 新村 出 (2008) 『広辞苑 (第六版)』 岩波書店
- 5 呂 叔湘 (2005) 『現代漢語詞典 (第五版)』 商務印書館
- 6 楊 華 (2006) 「名詞と動詞の道具的な組み合わせ」『日本語学論説資料 43 第5分冊』 国立国語研究所
- 7 中川 正之 (1997) 「漢語の語構成」『日本語と中国語の対照研究論文集・下』 くろしろ出版
- 8 野村 雅昭 (1988) 「二字漢語の構造」日本語学 5月号 明治書院
- 9 松下大三郎 (1979) 『改選標準日本文法』 勉誠社.
- 10 孫 長叙 (2006) 『汉语词汇』 商務印書館

(平成 22 年 3 月 31 日受理)